

特集 中央アジア
開かれた地域へ



子どもの日は僕が主役

from TANZANIA タンザニア

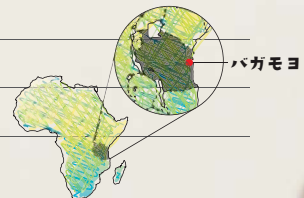


タンザニア最大の都市ダルエスサラームから北に約65キロ、プワニ州バガモヨ。地元の小学校でイベントが開催されるというので、足を運んでみた。

アフリカには、日本でいう「子どもの日」がある。それが6月16日。子どもの健やかな成長を願って、あちこちで地域を挙げて盛大にお祝いをする。イベントの準備をするのは、県や郡の職員、学校関係者など地域の大人たち。この日1日は子どもたちが主役。楽しそうに歌い、踊る姿を、みんなが優しいまなざしで見守っていた。

近年、急速に関関が進んでいるバガモヨだが、いまだに貧富の差が激しい。子どもたちは破れた服を着て、ボロボロになったサッカーボールを使い、日が暮れるまではだして駆け回っている。

そんな彼らも、この日は年1回の晴れ舞台。満面の笑みを浮かべ、ヘトヘトになるまで楽しんでいた。



撮影：浦勇樹（タンザニアノ青年海外協力隊）

あなたの作品募集中！

「my photo」では、あなたが撮影した写真を募集しています。貧困や環境問題などをテーマにした写真、国内外問わず国際協力の最前線で活動に励む日本人や開発途上国の人の姿、テレビや新聞ではなかなか報じられない土地の風景や人々の暮らしなど、国際協力や途上国を身近に感じられる写真を、撮影時のエピソードを添えてご応募ください。応募作品の中から毎号1枚、本コーナーで紹介させていただきます。

応募条件 ①応募者本人が撮影した作品に限ります。②被写体に関する肖像権は、応募者の責任において了解が得られているものとします。③写真は、解像度が300万画素以上(目安)で撮影されていること、また画像の記録形式はJPEGを推奨します。

応募方法 お名前、連絡先(電話番号とEメール)、エピソード(300～350字)、記名の可否をご記入の上、写真とともに応募先アドレスまでEメールでお送りください。

*応募作品は本コーナーの他に、事前確認の上でJICAの広報活動に活用させていただく場合があります。ご記入いただいた個人情報はこちら以外の目的では使用いたしません。また、応募作品はご返却いたしませんので、あらかじめご了承ください。

応募 / 問い合わせ先

jica-photo@idj.co.jp

(「mundi」編集部宛)

「mundi」はラテン語で“世界”。開発途上国の現状や、現場で活動する人々の姿を紹介するJICA広報誌です。

Contents

02 my photo 子どもの日は僕が主役 タンザニア

04 特集 中央アジア 開かれた地域へ

国と人をつなぐ道 キルギス
障害から、その先へ ウズベキスタン
薬草ビジネスで新たな道を開く タジキスタン
中央アジアってこんなところ！



18 PLAYERS 日本の養蚕技術、海を渡る 国立大学法人東京農工大学

20 地域と世界のきずな 産業都市の 過去から学ぶ

北海道夕張市



22 JICA Volunteer Story 馬屋原 愛 青年海外協力隊／キルギス／観光業

24 JICA STAFF 草間 佑子 JICAタジキスタン支所

25 JICA UPDATE

26 Voice 多田 一彦 NPO法人遠野まごころネット理事長

28 ココシリ 「ここが知りたい」 いろんなトピックを分かりやすく解説！

30 地球ギャラリー コロンビア 未来への歩み



37 イチオシ! 本・映画・イベント

39 MONO語り みんなが笑顔になるスタイ

40 私のなんとかしなきゃ! 中島 浩司 元プロサッカー選手



JICAのビジョン

すべての人々が恩恵を受ける、
ダイナミックな開発を進めます

Inclusive and Dynamic Development

表紙
撮影：鈴木 革

キルギス東部、イシククル州に
広がる花畑。雄大な自然に恵
まれた中央アジアの国々は、
さらなる発展に向けて国づくり
を進めている



シルクロードが育んだ地域

古くから、さまざまな物語を紡いできたシルクロード。アジアとヨーロッパの懸け橋として、長きにわたり、ヒト、モノの交流に貢献してきた。その通り道として栄えてきたのが、ユーラシア大陸の真ん中に位置する中央アジア。ウズベキスタン、カザフスタン、キルギス、タジキスタン、トルクメニスタンの5カ国だ。雄大な自然に囲まれ、人々の生活は肥やかな大地に支えられてきた。しかしこの地域には、立ち向かわべき課題がある。

それは、中央アジアの国々が持つ

特集 中央アジア

開かれた地域へ

同じ「アジア」でありながら、日本人にはあまりなじみのない中央アジア。しかし実は国際協力を通じて、さまざまなつながりが生まれている。

編集協力：帝京大学経済学部 杉浦史和准教授

共通点から見えてくる。この5カ国は、かつては旧ソビエト連邦の構成国。1991年の崩壊後に独立を果たしたが、新たな国として歩み始めた道は、決して容易なものではなかった。旧ソ連時代は、インフラ整備や人材育成が着実に進められていたが、独立後、優秀な技術者の多くはロシアに帰ってしまった。それから若い人々を中心に、試行錯誤しながら、文字通り「ゼロ」からの国づくりが懸命に行われてきた。

しかし独立から20年が過ぎた今。「旧ソ連時代から使い続けてきたインフラの老朽化は進むばかり。その一方で、新たに建設されたホテルなどのピカピカのインフラもあり、その対照に戸惑うこともあります」と帝京大学経済学部の杉浦史和准教授は話す。さらに、石油や天然ガスなど資源のある国とない国で開発に差が生じ、地域間で格差が生まれ始めている。

Central Asia

人気漫画家、森薫さんが
イメージキャラクターをデザイン!

中 中央アジア周辺を舞台に、雄大な自然の中で生きる人々の生活と文化に焦点を当てた漫画「乙嫁語り」。「漫画大賞2014」を受賞したこの作品の著者、森薫さんが「中央アジア+日本」対話の10周年を記念してイメージキャラクターを作成した。中央アジア5カ国と日本の国旗の色からイメージしたというキャラクターは、異国情緒あふれる民族衣装を身にまとった女性たち。森さんらしい柔らかなタッチで親しみやすいと好評だ。今後、外務省が実施する「中央アジア+日本」対話の広報や文化行事などのイベントに登場。日本と中央アジアとの交流や相互理解を促進していく。



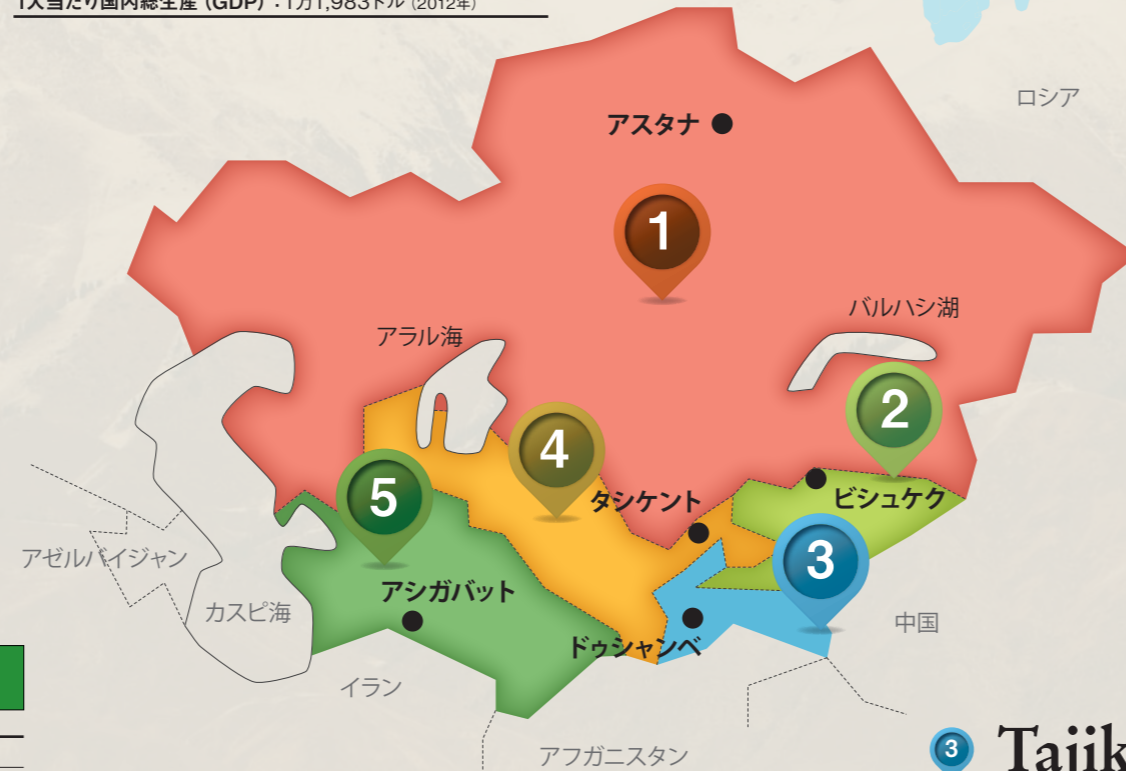
5 Turkmenistan

首都: アシガバット
面積: 48万8,000km² (日本の約1.3倍)
人口: 520万人 (2013年)
言語: トルクメン語、ロシア語
主要産業: 鉱業、農業、牧畜
1人当たり国内総生産 (GDP): 5,998.7ドル (2012年)



1 Kazakhstan

首都: アスタナ
面積: 272万4,900km² (日本の約7倍)
人口: 1,640万人 (2013年)
言語: カザフ語、ロシア語
主要産業: 鉱業、農業、冶金・金属加工
1人当たり国内総生産 (GDP): 1万1,983ドル (2012年)



4 Uzbekistan

首都: タシケント
面積: 44万7,400km² (日本の約1.2倍)
人口: 2,890万人 (2013年)
言語: ウズベク語、ロシア語
主要産業: 綿織維産業、食品加工、機械製作、金、石油、天然ガス
1人当たり国内総生産 (GDP): 1,367.1ドル (2010年)



Central Asia

2 Kyrgyz

首都: ビシュケク
面積: 19万8,500km² (日本の約2分の1)
人口: 550万人 (2013年)
言語: キルギス語、ロシア語
主要産業: 農業、畜産業、鉱業
1人当たり国内総生産 (GDP): 1,158ドル (2012年)

3 Tajikistan

首都: ドウシャンベ
面積: 14万3,100km² (日本の約4割)
人口: 820万人 (2013年)
言語: タジク語、ロシア語
主要産業: 農業、アルミニウム生産、水力発電
1人当たり国内総生産 (GDP): 953.3ドル (2012年)

参考: 外務省ホームページ

関係づくりも課題として挙げられている。「二国一力が力をつける努力をしながら、近隣国の情勢にも対応していかなければなりません」と杉浦准教授。特にテロや難民など多くの問題を抱えるアフガニスタンに対しては、国際社会と連携しながら、アメリカ軍撤退後の動きに注意を払っていかねばならない。

エネルギー資源の供給国としてだけでなく、アジアとヨーロッパをつなぐ重要なブレイヤーである中央アジア。日本企業の進出数はまだそれほど多くないが、今後のビジネスチャンスに目を光らせている企業も多い。その成長の可能性は無限大だ。

それぞれの国が自国の課題と向き合い、域内で手を取り合って開かれた地域を目指していく。日本もそんな中央アジアの持続的成長を支えながら、新たな関係を築き始めている。



過去から脱却し
新しい国づくりを

独立を果たしてからも、新たな困難に直面してきた中央アジア。旧ソ連時代のインフラを生かし、国の発展につなげようと、さまざまな努力が続けられている。そこで一役買っているのが日本だ。

同じアジアでありながらも、どこか遠く感じる中央アジア。それもそのはず、日本からの直行便もウズベキスタンの首都タシケント行きのみで、日本人観光客もそう多くない。しかし実はそんな中央アジアの国づくりを、日本は各国の独立以降、

オールジャパンで支えてきた。2004年には外務省がイニシアチブを取って「中央アジア+日本」対話の枠組みを設立。その中では特に、中央アジアの域内協力を推進している。「日本が他国のドナーと違う点は、政治的な介入なしに、中立的な立場で支援できることです。日本が間に入って情報共有の場を持ち、共に解決に取り組みれば、地域としてもっと発展できるはず」と杉浦准教授は話す。

これからの課題に
地域一体で進む

この枠組みの柱は、貿易・投資の促進、環境/省エネ・再生可能エネルギーの推進、ミレニアム開発目標(MDGs)の達成と格差是正、アフガニスタンの安定化、防災分野の協力。JICAはこれらを後押しすべく、有償・無償・技術協力を効果的に組み合わせながら、運輸交通、小規模電力のインフラ整備、農村開発、ビジネス振興などを通じて、中央アジアの持続的な成長を支えている。

さらに近年は、国境を接するロシアや中国、アフガニスタンなどとの

6月下旬、日本は梅雨の真っただ中、中央アジアのキルギスに飛び立った。初めての土地に行く時はいつも、不安と期待が入り混じる。日本を発ち、まずはトルコの首都イスタンブールへ。今回の経由地だ。日本からはそのルートが一

老朽化したインフラが危ない

その一方で、街中に入ると、年季の入った無機質な建物が目に止まった。道路もアスファルトで舗装されているが、車で走るとガタガタ揺れる。よく見ると、所々に穴が空いている。どうやら、旧ソビエト連邦時代に造られたもののようにだった。



標高3,000メートル地点にあるトンネル。物資を運ぶ大型トラックの通行が多かった

ビシュケク・オシュ道路で現場を管理する技術者たちと、道路状況について確認する田中専門家(左から3人目)と溝田専門家(左端)



しかし旅の疲れは、雄大な自然を前に吹き飛んだ。季節はこれから夏。見上げると澄み切った青い空、視線を遠くに移すと、万年雪を被った天山山脈が連なっている。

冬の雪に耐え得る強い道路を造る

大橋さんの後任として、今年5月から現地で活動するのは田中拓也専門家(NEXCO中日本)。キルギス国内のインフラの状況を調査し、現場の課題とニーズを把握した上で、具体的な対応策を提案するのが彼の仕事だ。

この日は田中専門家の調査に同行して、キルギスの南北をつなぐ唯一の国際幹線道路「ビシュケク・

オシュ道路」に向かった。日本の協力で整備されている道路だ。山道に入ると、急な勾配とカーブが続く。日光のいろは坂の比ではない。手すりにつかまっていなないと、バランスを取るのが難しいほどだ。「冬になると、地吹雪※によりこの地域だけでも毎年5、6回は通行止めになります」。そう課題を話すのは、この地域を管轄する運輸通信省の事務所のベクナザ

キルギス南北をつなぐビシュケク・オシュ道路。険しい山を切り開いたため、夏は落石、冬は地吹雪や雪崩などの被害が深刻だ



羊の群れの通過で大渋滞が起こることもある

※地面に降り積もった雪が強風によって空中に吹き上げられる現象。

国と人をつなぐ道

中央アジアの内陸国キルギス。ヒト・モノの移動は陸路に依存しているが、地形や気候条件に阻まれ、道路事情は良いとはいえない。その状況を改善すべく、日本の技術が結集したインフラ整備の協力現場取材した。

写真：鈴木幸(写真家)



from
キルギス
Kyrgyz

1996年に初めて日本での研修に参加したママエフ局長。「インフラをうまく機能させるためには法整備も重要だと学び、帰国後に取り組みを進めました」



満田専門家(左奥)、廣井専門家(右)らの指導の下、インフラ整備の維持管理に必要なマニュアルをロシア語と英語で作成した



「対処すべきだと思いませんか?」。
北村専門家がそう問い掛けると、「修理にはお金がかかる。優先順位は低い」という意見がほとんどだった。確かに、全ての橋を修理しては予算が足りない。「この程度の損傷になると、日本では確実に修理します。でもここは日本ではない。必要な技術と情報を共有した上で、最終的に判断する

のはキルギスの人たちです」と溝田専門家。南スーダンやフィリピンなど、世界各地のインフラ整備を支援してきた熟練の経験から生み出された教訓だ。
トンネルもそう、橋もそう。キルギスでは「壊れたら直す」。日本のように「前もって」の防災の意識は乏しい。しかし何かあってからでは遅い。日本から来たイン

フラ整備のスペシャリストたちからそれを感じ取りながら、現地の技術者たちは今すべきことを模索している。
日本人専門家と共に歩む
キルギス国内の道路網は、約3万4000キロ。約1700の橋が架けられ、5つのトンネルが通



日本の協力で2011年に整備されたビシュケク近郊の橋。両国の国旗は友好の証しだ

っている。その数字だけ見ても、これら全ての安全性を維持していくのは、そう簡単ではないことが分かる。しかし、日本から田中専門家の活動を支える大橋さんは、「私がいた3年間、何度も議論を重ねて進めていたことが、一つ一つ形になってきている実感があります」と話す。その思いを受け継ぎ、奮闘を続けている田中専門家も「対応すべき課題はまだたくさんありますが、政府の人たちと共に国づくりに関わっていることにやりがいを感じます」と意気込む。
これまで20年近く、日本との協力を担当してきた投資プロジェクト実施局のクバニチベック・ママエフ局長は、新たな挑戦をする時期だと考えている。「何よりも、資金確保は最優先課題の一つ。有料道路の設置などを検討していきたい」と意欲を燃やしている。「私たちと一緒に悩み、行動してくれる日本人専門家は頼もしい。彼らから学びながら、キルギスでも若手の技術者を育てていきたい」。JICAのプロジェクトで作ったインフラ整備のマニュアルを、土木や建築を学ぶ地元でも活用できるようにしていきたいと考えている。



ビシュケク・オシュ道路沿いに暮らす遊牧民の家族。彼らが暮らすウルタと呼ばれるテントは、夏の暑さ、冬の寒さに強い構造だ



大橋さんの提案を受けて建設されたアスファルト工場。アスファルトは冷めると工事ができなくなる。工場を建てることで、周辺地域での作業をスムーズに行えるようになった

ール・バザライエフ所長。「国民の3分の2は経済的に何らかの関わりがある重要な道路。職員総出で復旧作業をしますが、除雪車も人も足りないのです」。
彼が言うように、ビシュケク・オシ道路の最大の難関は冬だ。キルギスの冬は寒く、雪深い。標高が高くなればなるほど雪崩や地吹雪が起りやすいが、十分な対策が取られていないために道路が雪で埋まってしまふ。雪崩防止や風よけ用のフェンスはあるが、所々壊れたままだ。
「このフェンスはいつ造ったのですか?」
「すぐに出動できる除雪車は何台ありますか?」
この地域のインフラ整備を担当して22年、チーフエンジニアのアナルベク・チヨツバエルさんと現

場を回りながら、田中専門家は質問を投げ掛ける。この道が封鎖されると、南北の物流が完全にストップしてしまう。何が何でも、道路を通すことが彼らの使命なのだ。
「まだキルギスで冬を越していないのですが、話に聞くと状況はかなり深刻です。私も函館出身ですから、雪国の大変さは分かります」と田中専門家。日本でさえも雪への対応は難しく、試行錯誤の繰り返しだという。「何事も百聞は一見にしかず。日本人専門家は現場に足を運んで見に来てくれるので心強い。一緒に対策を考えていきたい」とチヨツバエルさんは話した。

インフラの専門家を育てる

標高3000メートルを超えたところで、トンネルが見えてきた。国内で一番標高が高いトンネルだ。入り口には信号があり、数台の車が止まっている。「昔の基準で造られているので道幅が狭く、最近の大型トラックは2台すれ違うことができないんです」。国内外でトンネルの調査に携わる復建調査設計株式会社の廣井和也専門家はそう説明してくれた。このトンネルが造られたのは、なんと50年も前だという。

て、まずは安全性を確保するためにトンネル内の照明をLEDに一新し、監視カメラの設置台数を増やした。「トンネルを掘るのは、時間も技術もかかる。今あるものをきちんと維持管理し、問題に対応していけば長く使い続けることができます」と廣井専門家は話す。インフラ整備には、定期的なモニタリングが必要不可欠。そのノウハウを伝えるために、株式会社建設技術インターナショナルの溝田祐造専門家率いるプロジェクトチームが現地入りしている。彼らがタッグを組むのは、運輸通信省の技術者から選ばれた、マスタートレーナー。定期的に各地を回りながら情報収集をし、一つ一つ対



現地調査の後は、そこで得た情報をデータベースに落とし込む。必要な情報にすぐにアクセスできるシステムづくりを進めている

策を考え、現場に指示を出していく。
次の日には、マスタートレーナーたちとビシュケク近郊の橋の視察へ。「ここにひびが入っている危ないですね」。そう指摘するのは橋梁管理を専門とする北村隆理専門家(建設技術インターナショナル)。「皆さんはこれを見て、ど



橋桁の下に入り、破損状況について確認する北村専門家(右)。「彼ら自身の維持管理方法を見つけてほしい」



久野研二JICA国際協力専門員(右)の力を借り、障害への理解を深めてもらうための研修のやり方をウズベキスタンの障害者たちに伝えた

障害者権利条約の批准に向けて、まずは何よりも、行政官や市民に障害者の置かれている立場を理解してもらう必要がある。そこで大野専門家は、活動休止状態だった障害者組織とタッグを組もうと考

えた。中央アジアの国々が一堂に会し、障害者福祉の在り方について議論する会議に、各組織のリーダーと共に参加。他

このような取り組みを通して、ウズベキスタンでは障害者権利条約の批准に向けた気運が高まっている。評議会のメンバーの一人、ファルハッド・アブドゥラフマノフさんは「これまで障害者組織は眠った状態でしたが、私たちは大きな一歩を踏み出しました。共に

准を訴えるセミナーを企画するなど、活動が始まっている。そんなある日、ろう者団体の一人が「盲ろう者の支援を強化できないだろうか」と。視覚と聴覚の両方に障害がある人たちは、周囲とうまくコミュニケーションが取れず、家の中でふさぎ込んでしま

歩んでくれた日本人専門家の功績は、ウズベキスタンの障害者運動の歴史に残るでしょう」と話す。全ての人が安心して暮らせる社会を目指し、ウズベキスタンと日本の挑戦が続いている。

歩んでくれた日本人専門家の功績は、ウズベキスタンの障害者運動の歴史に残るでしょう」と話す。全ての人が安心して暮らせる社会を目指し、ウズベキスタンと日本の挑戦が続いている。



2012年、国際会議でウズベキスタン政府はこれまでの障害者に対する取り組みを紹介。大野専門家も同行し発表をサポートした



外出する機会があまりなかった盲ろう者たちと、福田専門家らは一緒に市場やスーパーなどを回った

障者者権利条約の批准に向けて、まずは何よりも、行政官や市民に障害者の置かれている立場を理解してもらう必要がある。そこで大野専門家は、活動休止状態だった障害者組織とタッグを組もうと考

この動きを定着させるべく、2011年には、開発途上国でこの分野の支援に長く携わってきた大野純子専門家が現地に向かった。そこで目を付けたのが、06年に国連総会で採択された「障害者権利

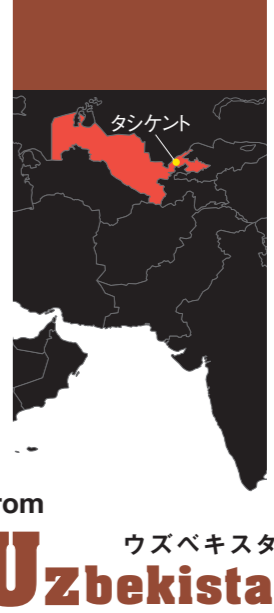
障者者権利条約の批准に向けて、まずは何よりも、行政官や市民に障害者の置かれている立場を理解してもらう必要がある。そこで大野専門家は、活動休止状態だった障害者組織とタッグを組もうと考

障者者権利条約の批准に向けて、まずは何よりも、行政官や市民に障害者の置かれている立場を理解してもらう必要がある。そこで大野専門家は、活動休止状態だった障害者組織とタッグを組もうと考



「学校に行きたい!」と話すアフマラル・ママノヴァちゃんに車いすを寄贈した大野専門家。アフマラルちゃんは元気に通学している

手を取り合い会話する福田専門家(左)とウズベキスタンの盲ろう者



from
Uzbekistan
ウズベキスタン



障害から、その先へ

社会福祉サービスが十分とはいえないウズベキスタン。障害者たちが結束し、声を上げられる社会を目指して、日本人専門家が奮闘している。

障害者を取り巻く 厳しい環境

街中にあるちょっとした段差や狭い歩道。もし目が見えなかったり、足が不自由だったりしたら……。そんな想像をしたことがあるだろうか。

障害者は日々、さまざまな「壁

に直面している。中央アジアのウズベキスタンでもそう。その数は、人口2890万人のうち約80万人。社会の理解が得られず、教育を受けられなかったり、職に就けなかったりすることも多い。

そんな状況を打開すべく、立ち上がったのが日本だ。日本では、障害者自身が結束して声を上げ、



農家グループに甘草の根の採取方法を伝える宏輝社員のムニス・カリムゾダさん。枯渇しないように、全部を引き抜かず、一定の長さだけ切り取るなどの工夫を指導する



from
Tajikistan
タジキスタン

日用品に欠かせない 薬草

お菓子、しょうゆ、風邪薬、シャンプー、スキンケア製品。私たちが使うこれらの日用品には、ある共通の成分がよく含まれている。甘味成分や鎮痛・解毒作用、保湿効果などがあるグリチルリチン酸だ。

そしてそれを生み出す唯一の植物が薬草の一種である「甘草」。マメ科の多年草で高さは約40センチ〜2メートル、四方に1〜2メートルの根を張って生える。この根にグリチルリチン酸が詰まっているのだ。

その甘草からグリチルリチン酸を抽出し、原料として粉末状に精製して国内外の企業に販売しているのが宏輝株式会社だ。1953年に創業し、現在、甘草から抽出する医薬品向け原料では日本最大

の出荷量を誇る。

しかし近年、このビジネスにある不安要素が持ち上がった。これは「これまでは甘草の主な生育地である中国から日本に輸入して加工していましたが、経済成長に伴い中国国内の需要が増加し、甘草の乱獲が進んでいるのです」と同社の伊藤眞取締役は話す。

しかも、甘草はちよつと特殊な植物。乾燥地帯で一定の間に多くの水分を吸収できる場所、つまり、川がよく氾濫する場所に生育することが多く、他の植物のように人工栽培が難しいのだ。そこで宏輝は2005年ごろから、輸入量を確保するために新たな生育地を探し始めた。

まずは、地球の衛星画像を閲覧できるソフト「Google Earth」を使いながら、甘草が生えていそうな場所を探索した。すると、中央アジアのタジキスタンに川が蛇行

していて氾濫しやすいような地域が見つかった。「こしかなない」。早速、社員が現地に飛んだ。首都ドゥシャンベから南へでこぼこ道を進むこと約4時間。ハトロン州に到着すると、目の前には大平原が広がり、川沿いにはぎっしりと甘草が自生していた。



人工栽培用のポットは苗床に集め、常に水分を吸収できるように水を張っておく



農家の女性たちも大活躍。甘草の人工栽培に向け、根をポットに入れていく

薬草ビジネスで新たな道を開く

医薬品や化粧品、食品の原料として、甘草を活用してきた宏輝株式会社。新たな生育地としてたどり着いたのは、中央アジアのタジキスタンだ。

大地に眠る宝の山

宏輝はハトロン州を新たな供給源にすべく、タジキスタン政府と交渉を開始。土地の利用権を得て、2010年、現地に甘草の加工工場を建設した。

あとは、いかに甘草を採取するか。宏輝にはある計画があった。「地元の農家は春から秋にかけて小麦や綿花を栽培していますが、冬になると農業ができず収入がない。甘草の採取が、冬の収入源になればと考えました」と伊藤さん。JICAと協働で宏輝のBOPビジネスが始めた。

まずは農家に参加を呼び掛けるため、説明会を開くことにした。集まったのは約20人のメンバーから成る2つの農家グループ。ここでは、そもそも甘草とは何かから説明する必要があった。というのも、農家の人たちにとって甘草はただの雑草。根がしっかりと張っているのが、農地を耕す時にはむしろ邪魔な存在だった。それが貴重な収入源になることが分かったと、その瞬間から彼らの目が輝き始めた。

そうなれば話は早い。耕運機やスコップなどを使い、どのやり方が最も効率よく甘草を採取できるかを農家と話し合い、2013年の冬から、本格的に作業が始まった。

2つの農家グループは、わずか4カ月で6万7000キロを採取。

甘草の根を宏輝が買い取り、平均月収は一気に約3倍に増えた。農家グループのリーダーを務めるサマドフ・シヨイルさんは「これまで冬の間は仕事がありませんでしたが、甘草の採取で収入を得られ、日用品の購入に充てることができました」と笑顔を見せる。

さらに宏輝は農家の人々と新たな挑戦を始めた。これまで難しいとされてきた甘草の人工栽培だ。実は宏輝は、かつて甘草の栽培に挑んだ旧ソ連の文献を入手して研究を重ね、約5年前から三重県にある研究施設で試験栽培を繰り返してきた。そして今回、とうとうタジキスタンの大地でそれを実践することにしたのだ。工場の近くに苗床を設け、甘草の根を一定の長さに切ってポットに入れて発芽させる。半年後、ポットに根付き始めたところで土壌に移植し、育てている。

今後、甘草の人工栽培による採取量が増えれば、農家の暮らしはもっと豊かになるはず。宏輝と農家はより良い生活を目指して、二人三脚で取り組みを進めている。



ポットに根付いた甘草を土壌に移植。数年後には採取できる見通しだ



現地に建設した宏輝の工場。甘草の根からグリチルリチン酸を抽出し、加工品を日本へ出荷する

※年間3,000ドル以下で暮らす貧困層 (Base Of the Pyramid) を対象にしたビジネス。

中央アジアってこんなとーりー!

まだまだ知らないことが多い中央アジアの国々。どんな人々が、どんな生活をしているのだろうか？その国に住む日本人に教えてもらおう！

キルギス といえば

必需品の カルパック!

キルギスの男性たちに欠かせないアイテムの一つが、「カルパック」と呼ばれる帽子です。フェルトでできているので、冬は暖かく、とんがった形で頭頂部に空洞ができるため通気性がよく、夏は快適。乾燥したキルギスでは冬は寒く、夏は強烈な日差しが降り注ぐので、この土地の気候に適応した形になったのかもしれない。

民族衣装として愛され、なんとカルパックの形をモチーフにしたバス停もあるぐらいです。お祝い事など伝統的なイベントのときにはもちろん、おじいさんも若者も普段からよくかぶっています。スーツ姿にカルパックをかぶったビジネスマンは、いかにもキルギスらしいですね。



JICA 専門家
原口明久さん

タジキスタン といえば

青い温泉!

タジキスタンには、日本人が大好きなものがあります。それは温泉。と言っても、この国の人々に普段、湯船に入る文化があるわけではありません。古くから湯治場として使われ、主に皮膚の病気を抱えた人やお年寄りが行くところ。今でも若者はあまり行かないようです。

東部のゴルノバダフジャン自治州のガラムチャシュマ温泉は、人気スポットの一つ。この数年開発が進み、海外からの観光客も多く訪れるようになりました。源泉が鍾乳洞のような形になっていて、お湯はなんとも鮮やかな青色をしています。最近ではこうした温泉の周囲にホテルや保養所が建設され、中には1泊300ドルという高級ホテルもあります。温泉で観光開発とは、なんだか日本と似ていますね。



JICA 専門家
梅野明恵さん

トルクメニスタン といえば

カラフルな首都!

トルクメニスタンといえばガス、ガスといえばトルクメニスタン。それほど、この国は天然ガスが豊富です。それを象徴するのは、首都アシガバット。街中に立ち並ぶ建物には大理石の外壁材が使われることが多く、白で統一されています。どこもかしこも形も高さも似た建物ばかりで、初めて来た人は方向感覚を失うこともよくあります。

でも、この真っ白な街並みががらりと変わるのが日没後。赤、青、黄…まるで信号のように、色を変化させる極彩色の派手なネオンで彩られるのです。省エネもなんのその、明け方まで惜しげもなく煌々と輝く街の明かりを見ると、この国のエネルギー資源の力を感じざるを得ません。



在トルクメニスタン日本大使館 専門調査員
長尾広視さん

カザフスタン といえば

豪快な肉料理!

「この世で2番目に肉をたくさん食べるのはカザフスタン人だよ。1番は誰かって?そりゃオオカミだよ」。この国の伝統料理「ベスバルマック」が目の前に置かれると、よくこんな笑話で盛り上がります。「5本の指」という意味のこの料理は、羊や牛、馬の骨付き肉を塩ゆでにしたシンプルなもの。食卓にドンと出でたら、5本の指で豪快にわしづかみにして食べることから、この名前がついています。

どの家庭でも客をもてなすときのメインディッシュはこれ。家畜の年齢、オスかメスか、太っているかやせているか、ゆで方はどうか、どの部位にするかなど、みんなかなりのこだわりがあります。遊牧民をルーツに持つカザフスタン人は、一期一会の出会いを大切にします。そのおもてなしの心が表れた一品です。



カザフスタン日本人材開発センターアスタナ分室
日本語常勤講師

増島繁延さん



特集 中央アジア 開かれた地域へ

ウズベキスタン といえば

まじめで温かい国民性!

ウズベキスタン人の性格を一言で表すなら、まじめ。何をやるにも、納得するまでとことん自分で考え、一度決めたら必ずやり遂げます。一緒に働いているJICA事務所の現地スタッフも、打ち合わせで納得できないことがあれば、「なぜ?」「これはどういう意味?」と、質問攻めです。

みんな親切で温厚で、いつも心が温くなる言葉をかけてくれます。私が忙しくて余裕がないときに「松ぼっくりが落ちていたからあげる」とさりげなく元気づけてくれたり、誕生日にそっと机にプレゼントを置いてくれたりと、常に仲間のことを思い、困っていると手を差し伸べてくれるのです。生活面でも、クリーニング屋さんに出しに行くときなど、どんな小さなことでもロシア語が苦手な私をサポートしてくれます。

面倒見が良く世話好きで、家族のように接してくれる。これこそ、典型的なウズベキスタン人。イスラム教徒が多い国ですが、日本人がなじみやすく、どこかほっとする国です。



JICAウズベキスタン事務所
企画調査員

三宅由雅子さん





飼育指導を担当した大澤光男客員教授(右端)と共に繭を収穫する農家の人々

消えゆく日本の伝統産業を後世に

今年、世界遺産に登録された富岡製糸場。これをきっかけに、明治以降の日本の発展を支えた養蚕業について知った人も多いのではないだろうか。世界一の養蚕王国として、高品質な生糸を輸出していた日本。しかし昭和に入

り、外国産の安い生糸、合成繊維の台頭などで衰退していった。

一方、今もなお、シルクロードとして栄えた地域を中心に、養蚕の文化は生き続けている。特にウズベキスタンは、中国、インドに続き、繭の生産量は世界第3位だ。しかし旧ソ連崩壊後は技術革新が進まず、生産量も質も下がる一方だった。

PLAYERS

国際協力の担い手たち

国立大学法人 東京農工大学

日本の養蚕技術、海を渡る

蚕を育て、繭を取り、絹を生み出す。日本の養蚕業の人づくりに取り組んできた国立大学法人東京農工大学がそのノウハウを携えて渡った先はウズベキスタンだ。



現地にある物を使って作業を効率化しようと、繭を作らせる場所として紙製の卵ケースを活用

アトラスを手取る普後教授。ヨーロッパなどでこのカラフルなデザインが人気を集めており、加工すれば価値を上げられる



多くの観光客が訪れるヒヴァの旧市街



アトラスを使った商品の販売店に看板を取り付ける川端准教授(右)

日本で失われつつある養蚕業の技術をウズベキスタンに伝え、受け継いでいきたい。そんな思いで立ち上がったのが、蚕の試験場と農学校が統合して設立された国立大学法人東京農工大学だ。この大学でシルクロードと蚕の品種の研究に携わってきた普後一名客員教授は、20年以上前から、中国やインド、そしてウズベキスタンを訪れていた。その縁がきっかけで、2009年からJICA草の根技術協力事業を通じて養蚕業の振興に取り組むことになった。

活動場所の一つは、養蚕が最も盛んな東部のフェルガナ。農家の技術も高く、確実に成果を残せると考えたからだ。もう一つは、最も気候が厳しい西部のウルゲンチ。ここで養蚕が成功すれば、他の地域でもできることが証明される。ウズベキスタンでは多くの農家が副業として養蚕に取り組んでいるため、基本的な飼育方法は知られている。しかし、普後教授らが農家を回ってみると、繭は色がくすみ、光沢も足りない。聞いてみると、使用しているのは中国から輸入した低品質の蚕の卵。飼育方法にも改善すべき点が多いことが分かった。

品質を高める小さな工夫

品質が良い生糸を作ることができれば、養蚕業は農家の生計向上に役立つはず。そこで普後教授らは日本から高品質な蚕を持ち込み、飼育方法の改善

に取り組むことになった。例えば、蚕の餌となるクワの葉。ウズベキスタンは年中乾燥しているため、採ってきた葉を置いておくことばさばさになってしまふ。そこで、水で湿らせてたりビニールをかけたたりして管理し、蚕が幼い時は食べやすいように葉を細かく切って与えることを提案。また飼育箱に網を敷くことで、ふんを下に落とし清潔さを保つとともに、作業を効率化するため網ごと蚕を一気に移動させるようにした。そんな小さな工夫を一つ一つの指導していった。

「最初は、何だこの日本人は」と警戒する人もいましたが、別の農家で成果が出ると、自分もやりたいと言ってくるようになりまし」と普後教授。繭の品質が上がったことで、収入も2

割ほど増えた。「絹で人工血管を作る技術が開発されるなど、養蚕業は多くの可能性を秘めている。だからこそ、ウズベキスタンで発展させる意義があるのです」と期待を込める。

農家を支える新しい光

東京農工大学の取り組みには、もう一つ目標がある。ウズベキスタンでは、養蚕は女性の仕事。付加価値を付けて現金収入を増やし、女性の自立につなげたい。アラル海の研究などで20年以上、中央アジアに携わってきた川端良子准教授が目をつけたのは、この地域に伝わるアトラスと呼ばれる絹織物だ。

「日本にはない色合いは、吸い込まれそうな美しさです。今は伝統衣装に使



アトラスを使って農家の女性たちが作った商品には、日本で募集したアイデアが生かされている

われていますが、ポーチやシュシュ、コースターなどの商品作りを始めました。農家の女性たちに作り方を伝える講習会の開催、新しい商品の開発、販路開拓などに奮闘している。世界遺産に登録された観光地ヒヴァに販売店をオープンし、日本でも成田国際空港や関西国際空港での販売にこぎつけた。

この取り組みを共に進めるウズベキスタン・ビジネス・ウーマン協会のケンジヤエバ・グルノーザさんは、「自分たちの力で新しい商品を生み出し、販売できるとは思わなかった。東京農工大との出会いを通じて、人生が変わりました」と笑顔を見せる。

質の高い繭を作り、絹織物に付加価値を付けて商品に変える。日本の技術を受け継ぎ、ウズベキスタンの養蚕業はもって輝いていくはずだ。



今年2月に開催された夕張国際ファンタスティック映画祭の様子。市内の8カ所で作品を上映した



夕張市役所を訪問した際は、石炭採掘時のメタンガスを発電に利用できないかといった石炭の可能性についての質問も上がった

産業都市の過去から学ぶ



映画祭プロデューサーの澤田さん。有名な映画の看板を設置するなど、映画を生かしたまちづくりに奔走中

かつて炭鉱の街として隆盛を誇った北海道夕張市。現在は観光や農業など、新たな産業振興の道を模索している。その経験を共有し、新しい地域開発の手法を探るため中央アジアから研修員が訪れた。

〔北海道〕

夕張市



北海道夕張市

面積763.20km²。人口約9,970人。気温差が大きい気候を活用して作る夕張メロンは、全国的な知名度を誇る。炭鉱の街として日本の高度経済成長を支えたが、閉山により人口が激減し、2007年に財政再生団体に。海外からの視察受け入れなどを通じて外からの意見も取り入れながら、地域活性化の道を模索している。



夕張市内の石炭博物館を視察する中央アジアの研修員たち。炭鉱の歴史を貴重な観光資源として活用している

過去を乗り越えて 新たな一歩を

新千歳空港から1両のローカル列車に乗り込んでしばらく走ると、車窓に広大な農地が広がった。約2時間かけてたどり着いたのは夕張市だ。

街を歩くと、所々に空き家があるのが目に付いた。夕張市はかつて、20以上の炭鉱を抱えた日本でも有数の石炭の産地だった。戦後の高度経済成長を支え、ピーク時には炭鉱の労働者やその家族で約12万人もの人々が暮らした産業都市だ。しかし主なエネルギー資源が石炭から石油へと転換したことから、1990年、約100年続いた夕張の石炭産業は幕を閉じた。

「私の国にも産業を炭鉱に依存している街があり、夕張市の取り組みに興味があります。そう話したのは、タジキスタンのトゥルスンザデ市上級法律官のフドヨロフ・フィルダウスさん。7月上旬、北海道の地域開発を学ぶJICAの研修の一環で、中央アジアの研修員たちが夕張市を訪れていた。

夕張市まちづくり企画室の押野見正浩さんは、「炭鉱から観光へ」をスローガンに、ホテルやスキー場などの観光施設に投資しました。結果的にそれが市の財政を圧迫する一因となり、2007年に財政破綻しました」と説明する。2025年までに返済しなければならぬのは353億円。水道や福祉、医療など、最低限の行政サービス以外は予算が激減し、2013年には



石炭博物館では、日本で唯一、実物の坑道や採掘現場を見学できる

人口が1万人を切った。もう一度、夕張市を笑顔であふれる街にしたい。今年からは、全国ブランドとして有名な夕張メロンを台湾と香港に輸出し始め、夕張のゆるキャラとして人気の「メロン熊」などを活用しながら、全国に向けても積極的にPRしている。

また、元東京都職員の鈴木直道市長自らが企業誘致に力を入れ、製薬メーカーなど、東京や横浜などの企業が少しずつ進出を始めている。新千歳空港や苫小牧港、県庁所在地の札幌にも車で約1時間という立地が魅力だ。

その現状を聞いた研修員たちは、「夕張には豊富な石炭が眠っている。資源を活用して化学製品を作ってはどうか」「夕張の自然の豊かさに感動した。ここに日本の伝統的な家屋が並んでいたら、観光客の目を引くのではないかと、次から次へと意見が上がった。押野見さんは「実際に夕張を見て感じてもらうことで、私たちとは違った視点からの意見を聞くことができます。それは夕張市にとって大きな収穫です」と話す。

課題を共有する仲間として 手を取り合う

夕張市の活性化に向けて、市民も動き出している。その代表的な取り組みが、夕張国際ファンタスティック映画祭だ。90年から市が運営していたが、財政破綻で存続の危機に。映画の街を守りたいと市民の手で続けられ、今年2月で24回目を迎えた。

「なぜ夕張で映画祭なのか、不思議に思いませんか？」

そう研修員に問い掛けたのは、夕張市民で映画祭プロデューサーを務める澤田直矢さん。炭鉱が栄えた最盛期、市内にはなんと17もの映画館があった。その伝統を受け継いだこの映画祭は、国内外の多彩な作品を上映し、今年には1万4000人が来場。「キル・ビル」で有名なクウェンティン・タラントイーノ監督など、この映画祭での上映をきっかけに世界的に評価された

監督も多い。映画界の人材を発掘する場として継続し、夕張の名前を世界に広めるきっかけにもしたい」と語る。

アルメニア経済省のゲヴォルギヤン・コリオンさんは、「夕張のように新しい産業や市場開拓に目を向けて、地域活性化に取り組みむ必要性を実感しました」と話す。中央アジアの国々には共通の課題が多いが、これまで地域振興に携わる行政官同士が集まる機会にはほぼなかったそう。「お互いの成功例や失敗例を共有できれば、効率的にそれぞれの取り組みを進められるはず。これからのネットワークを大事にしたい」。研修員たちはそう口をそろえた。

夕張市の経験を、中央アジアの地域づくりに生かす。地域振興に奮闘する夕張市での学びが、新しい未来をつかむヒントになったはずだ。

「青年海外協力隊 現職参加」

馬屋原 愛

MAYAHARA Ai

戦地で開いたコンサート

2014年、世界遺産に登録されたシルクロード。中国と中央アジアを結ぶ交易路に点在する都市や寺院など33の遺跡が対象となり、キルギスでは3つの遺跡が世界遺産となった。

これから観光客の増加が見込まれる中、より多くの人にキルギスを楽しんでもらいたいと奮闘している日本人がいる。青年海外協力隊の馬屋原愛さんだ。

国際協力に興味を持ったのは高校2年生の時。地元の合唱団に所属していた馬屋原さんは、東欧のセルビアでのコンサートに参加するために現地へ。ユーゴスラビア紛争の終結直後で、街中に残る空爆の痕を目の当たりに

「観光客にキルギスの魅力を伝えたい」

世界遺産や手付かずの自然が魅力のキルギス。馬屋原愛さんはより多くの観光客に来てもらえるよう、バスの路線図の作成などに取り組んでいる。

JICA Volunteer Story

PROFILE

1983年神奈川県出身。大学卒業後、近畿日本ツーリスト株式会社に就職。2013年1月から現職参加制度を活用し、青年海外協力隊(観光業)としてキルギスで活動中。



キルギス北東部のタムチ村で、観光案内の資料作成に必要な情報を得るため、地元のゲストハウスのオーナーらと話し合う馬屋原さん(左から2人目)



した。病院や学校などで開いたコンサートでは、「音楽を通じて心を落ち着けることができた」という現地の人々の声を聞き、そのうれしそうな表情が目には焼き付いた。

大学時代には世界各国を旅し、卒業後は旅行会社に就職。修学旅行のアレンジを担当することになった。これまでは同じようなコースを回ることが多かったため、新たな宿泊先や訪問先を探し出し、提案した。「学生さんたちが観光地で楽しんだり、学んだりする様子を見るのがやりがいでした」。

そして入社5年目、会社にボランティア休暇制度ができたことを知る。協力隊の活動に魅力を感じていた馬屋原さんは、このチャンス逃すまいと上司を説得して応募した。

観光客として感じた課題を克服

キルギスの首都ビシュケクに本部を構える国内最大規模のNGO、CBT(Community Based Tourism)協会が活動することになった馬屋原さん。国内に15の支所を持ち、観光ツアーの企画やイベントの開催などを通じて、観光業を促進している組織だ。馬屋原さんは観光客にとって何が足りないか、自分の身で体感するために1カ月間国内を回った。

世界遺産である遺跡はもちろん、透明度の高さが魅力のインクタル湖、標高3000メートルに広がる大草原など、美しい自然も魅力のキルギス。そんな観光資源の多さを実感すると同時に、ある課題に気が付いた。「街中の標識や交通機関の表示は全てキルギス語。バスに乗っても行き先が分からず、路線図もないので、バス停がどこなのか分かりませんでした」。

これでは、観光客は移動に困ってしまう。そこで馬屋原さんは、地図上にバス停と順路を示した路線図を作る



a.馬屋原さんたちが作成した路線図。街の地図にバス停や順路、観光スポットなどを載せた
b.インクタル湖南岸の村で鷹狩りショーを企画。CBT協会の職員と準備をする馬屋原さん
c.CBT協会の職員が集まった勉強会。キルギスではホイ捨てが多いため、ごみ問題で世界遺産登録が危ぶまれた富士山の事例を紹介した
d.標高3,000メートルに広がる大草原とソソクル湖。乗馬体験もでき、観光地として人気だ

うと考えた。まずはビシュケク市内のバス停の位置を調べ、路線図のデザインを地元企業に依頼することにした。しかし、「そもそも地図がないので、デザインするのは難しい」と企業側。旧ソ連時代、キルギスでは地図は軍事機密として扱われ、市民が利用することはできなかった。現在も入手が困難で、どれだけ企業を回っても、回答は同じだった。

それでも、あきらめなかった。観光業で地図がいかに重要か、数々の旅行をアレンジしてきた馬屋原さんには痛いほど分かっていただけからだ。行き先を調べるのはもちろん、道に迷った時も地図さえあれば地元の人に聞ける。「地図はどうなった?」と気に掛けてくれる同僚もいて、途中で投げ出したくないと思いました。同僚と手分けして企業回りを続けた。

そして半年後、ついにその努力が実る。地図を持ち、それを基にデザインしてくれる企業を見つけたのだ。ここから路線図の作成は一気に進んだ。地図上にバス停を表示し、路線ごとに順路を色分け。外国人向けに英語の表記も加えた。

完成した路線図は好評だ。各バス会社に配布して車内に掲示してもらい、CBT協会の各支店にも貼り出した。「観光客が路線図を見ながら、どこに行こうか話し合っている様子を見るとやりがいを感じます」と馬屋原さんは笑顔を見せる。

CBT協会のアスルベック・ラジエフさんは「アイさんがキルギスの観光情報を日本の地方自治体のホームページなどで紹介してくれたため、ツアーに参加する日本人が増えています」と話す。

活動期間は残り半年。「世界的にはまだまだ未知の国。もっと多くの観光客を呼び込みたい」と、馬屋原さんは新たな観光地の開拓も始めている。キルギスの魅力を伝えるため、彼女の挑戦は続く。



JICAボランティア事業の一環として開催したサッカーイベントで地元テレビ局の取材に応じる草間さん(左)

ロシア語を生かして 現場に根差した協力がしたい

アジアとロシア、ヨーロッパの間に位置する中央アジアのタジキスタン。JICAタジキスタン支所の草間佑子さんは、現地の人たちと意見交換をしながら、インフラ整備などに取り組んでいる。

母国に帰らない人々

中学1年生の時、親の仕事の都合でアメリカで暮らし、現地の学校に通いました。私のクラスには、イラン、ナイジェリア、ルワンダ、北朝鮮など世界各地から学生が集まっていたのですが、帰国の日が迫ってきて、特に仲の良かったイラク人の3姉妹にこれからどうするかを聞いてみました。すると、「国に戻っても生活が苦しいのでアメリカに住み続ける」と。他のクラスメイトも、ほとんどが同じ答えでした。

母国であるにもかかわらず、彼らが戻りたくないという国はどこなところなのか。そんな疑問がずっと消えず、大学時代は紛争問題の解決や難民の保護などに必要不可欠な国際法について学びました。そこでさまざまな国の現状や課題を知るうちに、国際法の理念の実現に貢献したいと思うようになり、国際協力の道に進もうと決めました。

悔しさをバネに ロシア語を学ぶ

就職1年目、中央アジアのウズベキスタンで7カ月間研修を受けました。旧ソ連時代の影響で制限されていた企業の経済活動の活性化に向けて、日本人専門家と倒産法の整備に取り組みました。独立から試行錯誤しながら歩みを進めている中央アジア諸

国が、これからどうなっていくのか強い関心を持ちました。

帰国後は、東京農工大学をパートナーとして、ウズベキスタンの養蚕農家を支援する事業に立ち上げから関わることができました。その他にも中央アジア諸国への協力に携わったのですが、現地が使われているのはロシア語か現地語。言葉が通じないが故に、相手の思いをきちんと理解することができず、悔しい思いをすることもありました。そこで、この地域で広く使われているロシア語を学びたいとロシアの大学に1年間留学し、語学力を磨きました。

タジキスタンで安心して暮らせるように

2013年、念願がなつてタジキスタンに赴任しました。現地では暮らしていると、職がないためにロシアなど周辺国へ出稼ぎに出る人がいかに多いかを実感します。この状況を目の当たりにして、かつてアメリカの学校で出会った母国への帰国を拒む友人たちを思い出しました。この国の人たちが国を離れずに暮らせるようにしたい。そう思い、日々の業務に取り組んでいます。昨年冬の冬に地方の村を訪れた時、マイナス10度にもなる極寒の中、子どもたちは衣類を何重にも着込み、何時間もかけて山で薪を拾っていました。タジキスタンは国土の9割以上が山。水力発電に適しているも



JICAタジキスタン支所

草間 佑子
KUSAMA Yuko

大学卒業後、2007年にJICAに就職。地球ひろば、東・中央アジア部、ロシア留学を経て、2013年6月から現職。



甘草の採取を通じて収入向上を目指すタジキスタンの農家の女性たちと

の、冬場は水が凍ってしまい、十分に発電できていなかったのです。

全ての人たちが、冬でも暖かく暮らせるようにしたい。そこで新たな発電施設や送配電網の整備に協力できないか、現地の電力大臣らと協議を進めています。「日本の協力は時間がかかる」と言われてしまうこともありますが、その分入念に調査を行い、確実に成果を残す事業を目指していると説明しています。

ここで役立つのが、これまで苦労して勉強してきたロシア語。通訳を介さずに行政官や住民たちと会話ができることで距離が縮まり、信頼関係につながっているような気がします。

これからもタジキスタンの人々に寄り添いたい、現場のニーズに応える協力をしていきたいです。

フィリピン・ミンダナオ和平の関係者が広島に集結

01



フィリピンのアキノ大統領も含め、ミンダナオの和平プロセスに関わる関係者が一堂に会した



広島宣言の採択に臨むムラド議長(左)とデレス長官(中央)

フィリピン南部のミンダナオ島で約40年続いた、モロ・イスラム解放戦線(MILF)と政府の武力紛争が終結し、包括和平合意文書が調印されたのが今年3月。この和平プロセスを継続的に支援してきたJICAは、6月23〜25日、バンサモロ新自治政府設立に向けた方針や課題を話し合う「ミンダナオ平和構築セミナー」を広島市で開催しました。

このセミナーは2006年からJICAとマレーシア科学大学が共催しているもので、ミンダナオ平和構築の関係者が率直に対話する貴重な場となりました。過去5回はマレーシアでの開催でしたが、今回初めて日本に会場を移し、MILFのムラド議長、和平プロセス大統領顧問室のデレス長官をはじめ、援助機関、NGO、教育機関などの関係者約90人が一堂に会しました。

23日にはオープニングを飾る公開フォーラムが開かれ、冒頭に田中明彦JICA理事長があいさつ。「和平はフィリピン全体の発展に寄与し、ASEAN全体の安全保障にもつながる。ミンダナオの事例は世界の紛争解決のモデルになる」と述べました。ムラド議長は基調講演で「合意した内容が実施されてこそ意味がある。合意に基づく制度づくりに向け、最も重要なのは自分たちの意思で決定していくことです」と強調しました。

3日間にわたった本会合では、バンサモロの社会・経済開発、自治政府の組織と制度、治安の正常化について議論が交わされ、25日には「広島宣言」を採択。デレス長官は、「具体的な和平プロセスが実施から実施へと移行するこの時期に、平和を象徴する広島で開催されたことは意義深い」と語りました。

JICAはこれからも新自治政府の体制や制度づくり、人材育成、地域開発計画の策定などを支援していきます。

田中理事長がブータンを訪問

02



ワンチュク国王陛下(左)と謁見した田中理事長

6月17〜20日、世界一幸せな国、として知られるブータンを田中明彦JICA理事長が訪問しました。50年にわたり日本と友好関係を深めてきたブータン。ジグミ・シリング・ワンチュク前国王陛下、ジグミ・ケサル・ナムギャル・ワンチュク国王陛下との会談では、日本人専門家やJICAボランティヤなど、人々を通じた協力に高い評価を受けました。またツェリン・トブゲイ首相などとは、水力発電、農業、観光、中小企業振興、鉱物資源開発に対する協力について意見交換しました。

田中理事長は「日本ブータン協力50周年記念式典」にも出席した他、日本の協力が長年実施された西部の街パロで、国立種子センターや農業機械化センターを訪問。28年間にわたりブータンの農業協力を貢献した故・西岡京治専門家の慰霊塔を参拝しました。

ワールドカップでアフリカとつながる

03



コートジボワールのチームカラー、オレンジの服装をした観客がJICA横浜に集合

約1カ月にわたり、ブラジルで熱戦が繰り広げられた2014 FIFAワールドカップ。JICAは日本の対戦国を身近に感じてもらうため、国内でさまざまなイベントを開催しました。

日本代表の初戦の相手はコートジボワール。JICA横浜ではソニー株式会社との協力により、パブリックビューイングを開催しました。日本在住のアフリカ出身者や一般市民など、合わせて360人以上が集まりました。応援のルールは「どちらが勝っても笑顔で」。あえて日本とアフリカをひとつに！というテーマ通りに、会場内は友好ムードに包まれました。

JICA関西などでもパブリックビューイング、JICA地球ひろばやなごや地球ひろばでは対戦国に関連する展示も実施し、サッカーを通じて、多くの人が世界に目を向けるきっかけになりました。

災害経験で アジアとつながる

<Profile>

ただ・かずひこ

1958年岩手県遠野市出身。青山学院大学卒業。東日本大震災後、遠野市民を中心としたボランティア団体、NPO法人遠野まごころネットを設立。甚大な被害を受けた岩手県沿岸部に近い立地を生かし、現地の混乱を避けるために遠野市で個人ボランティアの受け入れを行う。

NPO法人

遠野まごころネット理事長

多田 一彦

ワゴン車に積めるだけの水、コメ、灯油、毛布を載せて、友人3人と岩手県遠野市を出たのは2011年3月13日。泥だらけの道の瓦礫をどけながら、真つ暗なトンネルを抜けて大槌町に入った。至る所から煙が立ち上り、灰色の雪が舞っている。泥と瓦礫のすき間から見えるアスファルトを目印に走る。

道端には時折、遺体があった。この時からしばらくの間、私の記憶には色がない。山火事の残煙の中、山道を通って、大槌町の災害対策本部にたどり着くと、不眠不休で指揮を執る町役場の平野公三総務課長がいた。彼の家族の安否は不明だった(数日後に連絡が取れた)。「何かできることはないか」と尋ねると、「町長も多くの職員も死んでいるだろう。何でもいいからやってくれ」と彼は答えた。

室内を見回すと、きちんとした避難所マップがなかった。私たちは3日かけてそれを作り、各避難所を回ってニーズを聞き、一つずつ対応していくことにした。とにかく必要な物資を集めては配った。

2週間ほどたち、ふと気が付いた。県外ナンバーの車、野宿する人、倒壊家屋に入る人の姿が目についたのだ。「危ない」。とっさにそう思った。遺体の収容が終わっていないし、道の瓦礫も取り除かれていない。渋滞が起これば、物資も運べない。そこで私たちはボランティアをまず遠野に集め、バスで被災地に運び、作業が終わったら遠野に連れて帰ることにした。こんな状況下で、私たちだけで対応できるわけもない。みんなの力を借りる以外に方法はなかった。

私たちは「遠野に集まれ！」と世界中に呼び掛

けた。言葉の問題はどうするかなどの不安もあった。しかし「外国から来る人の方もずっと不安に決まっている。それでも何かしたいと言ってくれるんだ。自分たちが不安に思っている」と主張した。結果、世界中からたくさんの方が集まってくれた。それは今も途絶えない。ソウルや四川、ジャカルタやアチェ、マニラやバンコクにまでネットワークが広がった。

私はその縁で、2011年9月、ジャカルタとアチェの大学に呼ばれて講義をした。「日本には年間3万人もの孤独死と自殺者がいる」と話すと、現地の人たちは「そもそも孤独死とは何だ」「信



福島第一原子力発電所の事故の影響で、地元では育てられなくなったカボチャ「いいいたて雪っ娘」を、遠野まごころネットの支援で遠野市内で代理栽培している



台風「ハイエン」の被害を受けたレイテ島。そこにある人々の笑顔は変わらない

じられない」という。親せきが老人や子どもの面倒を見るから、保育所もそんなに必要ないという。アチェの小さな村では、少年たちが郷土芸能の大鼓で大歓迎してくれた。夜9時を回っているにもかかわらず、住民が続々と集会所に集まってくる。小さい子どもは、「自分も大きくなったら、お兄ちゃんみたいになる」と、太鼓を力強くたたく村のヒーローをキラキラと輝く瞳で見ている。

震災から1カ月ほどたったころ、大槌町でも白澤伝承館(私設避難所となっていた)の人たちが「いつまでも泣いてばかりはいられない。今日から前を向く努力をする。でもまだ無理な人は待っているから大丈夫だ」と、郷土芸能である白澤鹿踊りを披露した。見る人舞う人、全ての人が泣いていた。郷土芸能はどの国でも、コミュニティの形成には重要なのだと感じる。

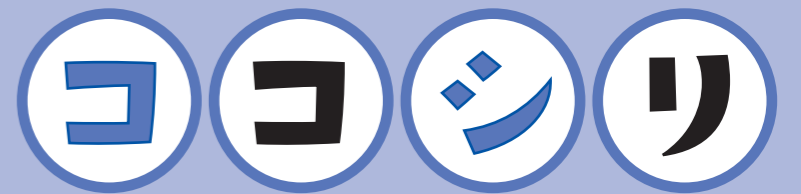
昨年11月、大型台風「ハイエン」で大きな被害を受けたフィリピンのレイテ島を訪れた。現地の人々はたくましく明るかった。自力で小屋をどんな建てて住んでいたし、どこへ行っても子ども

私が子どものころは、所構わず野球やサッカーをやるものだから、近所のガラスをよく割った。そして、大人たちはよくこう言っていた。「お前が大人になるころには、日本はすごくなくなっているぞ」と。しかし今はどうだ。少子高齢化で人口は減る一方。町がなくなるかもしれない。

しかし、悲観することばかりではない。被災地の小中学生が私たちの事務所に「いつもありがとう」とお礼を言いに来ってくれる。私は、彼らを見ていると、アチェの子どもたちを思い出す。「この子たちが大きくなるころには、もっと良い日本になるぞ」。そう確信するのだ。

世界には、政治では解決できないことが山ほどある。だからこそ私たち民間人が、協働し、補い合うことが重要なのだ。NPO法人遠野まごころネットは今、ASEAN(東南アジア諸国連合)の人たちと連携して、コミュニティの強化と防災に協働で取り組むプロジェクトをスタートさせてきた。小さい力でもできることを一つずつ、実行していきたいと思う。

たちの声がする。仮設住宅は粗末なもので、板一枚のドアと窓があるだけ。6畳一間に3人が暮らし、向こう三軒両隣の音が筒抜けなのだ。日本なら「うるさい」とクレームが起こり、とても耐えられないだろう。「子どもはうるさいもの。元氣な証拠でいいじゃないか。地域の宝だ」。この言葉に私は震えた。



「ココが知りたい」。国際協力に関係する
いろんなトピックを分かりやすく解説します!



国際協力60周年

外務省が作成した国際協力60周年のロゴマーク

ODA政策

「国際協力60周年」 みんなで 国際協力を知ろう!

2014年は国際協力60周年。これをきっかけに、日本の国際協力について知り、開発途上国に目を向けてみませんか。

日 本が開発途上国援助に取り組む国際機関「コロンボ・プラン」に加盟し、政府開発援助（ODA）を通じた国際協力を開始したのが1954年。2014年は、「国際協力60周年」の節目の年に当たります。

これを受けて外務省は、日本国内でも多くの方に国際協力や途上国について関心を持ってもらうきっかけを増やそうと、年間を通してさまざまなイベントを計画していま

また、10月6日の国際協力の日に合わせて毎年行われている「グローバルフェスタ JAPAN」も「国際協力60周年記念事業」として実施します。今年は10月4日（土）、5日（日）の2日間、東京の日比谷公園で外務省・JICA、認定NPO法人国際協力NGOセンター（JANIC）の開催で行われます。

国際協力60周年記念事業認定ガイドライン

URL : www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/annai/60th/nintei.html

事業認定の対象

以下の条件を全て満たすものについて、「国際協力60周年記念事業」としての認定を行います。

- ①2014年12月31日までの期間に実施される事業で、日本の国際協力への理解促進を目的とするもの。
- ②特定の主義・主張、政治活動や宗教の普及を目的とせず、また公序良俗に反しない事業であること。営利行為を主たる目的としない事業であること。
- ③事業実施にかかる経費については、主催者が一切の責任を負うこと。
- ④所定の書類を提出していること。

必要書類 (外務省ホームページからダウンロード可能)

事業認定申請書／誓約書／事業内容が明確となる資料 (事業概要、事業収支予定など) / 申請事業主体の活動内容を表す資料 (主催団体の概要、パンフレット、規約、過去の実績など)

送付先・問い合わせ先

〒100-8919 東京都千代田区霞が関2-2-1
外務省国際協力局政策課広報班 ※封筒に「国際協力60周年記念事業認定申請」と明記してください。
TEL : 03-3580-3311 (内線3559/3095)
Eメール : Kokusaikyoryoku60@mofa.go.jp

審査結果の通知

申請者に対して個別に通知。

昨年の「グローバルフェスタ JAPAN」の様子



セルビアの洪水被害に対して日本が供与した緊急援助物資



首都を走るバスには日本とセルビアの国旗が。清潔で快適だと好評だ

「セルビア洪水被害に対する支援」 情けは人のためならず

5 月中旬、セルビアの首都ベオグラード近郊、中部、西部で降り続いた集中豪雨により大規模な洪水が発生し、物的・人的に甚大な被害が発生しました。これを受けて日本は緊急援助物資の供与を決定。寒冷地用のテントやスリーピングバッグ、発電機などを現地の赤十字社を通じて被災地に届けました。

この洪水被害のニュースを受けて、日本の市民からも駐日セルビア共和国大使館に寄付金やお見舞いの手紙が寄せられています。その理由の多くは、東日本大震災後に、セルビアの人々から総額2億円以上の義援金が寄せられたこと。「今こそ恩返しをする時だ」と多くの人が動いたようです。

日本人にとってあまりなじみのないセルビアですが、実は国際協力を通じて強いつながりがあります。1990年代の紛争中は国際社会により経済制裁が与えられましたが、2000年の民主化以降、日本は先立って公共交通機関の復旧などの支援を行ってきました。今でも日本が無償資金協力で供与したバスが市民の足として大切に使用され、ニッポンジンの愛称で親しまれるなど、多くの人が感謝を示しています。そんな助け合いの精神が、両国の友好関係をますます強めています。

Message from Haiti カリブ海に浮かぶアフリカ



1982年にユネスコ世界遺産に登録されたサン＝スーシ城



日本の支援によって整備されたレオガン市内の道路



市民を雇用して、復旧・復興を進める

在ハイチ日本国大使館

井上理恵 三等書記官

ハ イチは西半球ではアメリカに次いで2番目、1804年に独立を果たした歴史上最初の黒人共和国です。日本がまだ江戸時代だったころに旧宗主国フランスから独立を勝ち取ったことに思いをはせると、この国の歴史の深さを感じられます。

しかし、その早すぎた独立から歴史の波に翻弄され開発が進まず、西半球の中では最貧国です。さらに2010年1月にはマグニチュード7.0の大地震が発生し、死者31万人を超える甚大な被害を出しました。

現地からのメッセージは、ODAメールマガジン (www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/mail/) でご覧いただけます。

地球ギャラリー vol.71

Colombia

【コロンビア】

写真・文＝柴田大輔 (フォトジャーナリスト)

未来への歩み



コロンビア南部カウカ県の高地に暮らす
ミサック民族。鮮やかな衣装に身を包み、
学校に向かう子どもに母親が付き添う

照り付ける強い日差しの下、汗まみれになった男たちが、長さ20メートルほどの大木を担いで練り歩く。森から切り出したこの木には、コンドルの魂が宿ると伝えられている。約1日かけて集落の中心にある広場に運ばれた大木。男たちは最後の力を振り絞って、空に向かって真っすぐに立てた。夜空に浮かぶ満月が、

高揚する人々の顔を照らす。トウモロコシの種まきを前に、食べ物と酒をささげ、収穫の無事を祈る。コロンビア南部カウカ県のナサ民族が暮らす集落。「サケル」と呼ばれるこの祭りは毎年8月に行われ、その年の担当の集落の人々が全参加者に食事と酒を振る舞う。4日間にわたり、好きなだけ飲み、腹いっぱい

い食べ、踊り続ける。その光景は、日本の盆踊りとどこか似ている。司祭の後に続いて、みんなで笛と太鼓に合わせてステップを踏む。その列は、カタツムリやヘビなど、ナサの伝承に登場する動物の形を描いている。人々はこうして日々の力を養い、また日常の畑仕事へと戻っていくのだ。



集落内の広場に立てられた大木。午前0時にコンドルの魂が舞い降りるといわれる

地球ギャラリー vol.71



祭りの指揮を執る司祭の後に続いて踊る人々。周辺の集落からも、この日を待ちわびていた多くの人が参加した



切り出した大木を運び出す男たち。力強い掛け声が森の中に響く



アンデスに暮らすナサ民族の家族。人と土地が深くつながる、温かい空間に生きている



コカの葉をかむ男性。ナサ民族にとって、コカは医療や神事に使われる神聖な植物だ



音楽を通じて、民族の文化や考えを子どもたちに伝える



2013年9月、カウカ県の県都ボヤン市で、先住民族社会を脅かす政府の方針に反対するデモが行われた



ナサ民族の郷土料理「モテ」。たっぷりのトウモロコシに、食用バナナ、キャッサバ、鶏肉を混ぜて大鍋で煮る



カウカ県北部のキリチャオ市にある先住民族が運営するラジオ局「バユマツ」



古くから作り続けられているトウモロコシは、この地域の人たちにとって生活の中心となる作物だ

コロンビアには全人口の3%、約100の民族集団が存在するといわれる。カウカ県にはそのうち8民族が暮らし、県の人口の4分の1を占めるという。

その背景には、先住民族自身による復権運動がある。この20数年の間に、コミュニティラジオ局が各地に開設された。先住民族が自らの声

を直接発信しようという試みだ。また、学校では独自の教材が作られ、教育を重視し始めた。有機コーヒーを国外にも積極的に売り出し、トウモロコシなど、土地に根付く固有種の価値を見直し、次世代へ引き継ぐ運動も起こっている。民族を超えた強いエネルギーを感じる。

コロンビアでは、反政府ゲリラと政府軍の間で半世紀にもおよぶ紛争が続く。カウカ県は特にその被害を被ってきた場所の一つだ。しかしそんな厳しい時代の中にあっても、先祖の知恵と新しい文化をつなぎ、独自の未来をつくり出そうとする姿は力強く、美しかった。



古くからの名産である高品質の有機コーヒーを消費者に届けるために、土作りに精魂を込める



カウカ県北部産の有機コーヒーは、アメリカ、フランスにも輸出されている

バジェナート



話すように歌うのがバジェナートのコツだという。アコーディオンを弾きながら歌うことも



毎年4月には、北部の街バジェドゥバールでバジェナートフェスティバルが開催される



バジェナートに欠かせないアコーディオン。子どもたちも練習する身近な楽器だ

コロンビアの人々にとって、音楽は日常の一部。各地域には代々受け継がれてきた音楽があり、北部の「バジェナート」もその一つだ。「毎晩、家族が庭に集まると、お父さんがおもむろにギターを取り出してはみんなで歌ったものよ」。そう北部出身の人々は話す。

バジェナートの由来には、こんな一説がある。かつて電話がなかったころ、情報の“伝達人”として街から街へと移動し、街の中心の広場に立って情報を伝えた人物がいた。彼の名はフランシスコ・エル・オンブレ。いつしかギター、アコーディオン、ドラムで伴奏をつけて歌って情報を伝えるようになったといわれているが、詳しいことは謎のままだ。

バジェナートの特徴は、地域のちょっとした情報が歌詞に盛り込まれていること。例えば、“サンタマルタ、サンタマルタ、電車はあるのに線路がない”。これは北部の街サンタマルタに伝わる1フレーズだ。

植民地時代のスペイン、当時奴隷として連れてこられた人々の故郷アフリカ、そして先住民の文化が混ざり合っているコロンビア。バジェナートに使われるヨーロッパ産のアコーディオンやアフリカのリズムからも、その多彩な文化の影響を感じることができる。

取材協力：駐日コロンビア共和国大使館

地球ギャラリー

コロンビアの文化を 知ろう!

コロンビア人は鶏のだし汁が大好き。ほとんどのスープのベースは鶏で、一羽丸々煮込んでだしを取る。主食のジャガイモと鶏肉を入れて煮込めば朝ごはんの定番スープ「カルド」に、生クリームやアボカドなどを加えればクリームシチューのような「アヒアコ」になる。

中でも具だくさんのスープとして人気があるのが「サンコーチョ」だ。鶏のだし汁をベースに、ジャガイモ、キャッサバ、料理用バナナ、トウモロコシ、豚肉、鶏肉を入れ、じっくり煮込

んで塩とコショウで簡単に味付けする。野菜と肉のうまみが引き出された優しい味わい。がっつり食べたいときにおすすめの一品だ。

「コロンビア料理はシンプルな味付けで、日本人の口によく合いますよ」。そう話すのは、日本人とコロンビア人の両親を持つ小泉明さん。2005年から東京・恵比寿のバー「プントプンタ」のオーナーを務め、母親のステラさんと共に本場のコロンビア料理を提供する。

コロンビア料理といえば 具だくさんの鶏がらスープ

サンコーチョ



【RECIPE】

●材料(4人前)

鶏もも肉300g/スベアリブ300g
/トウモロコシ1本/ジャガイモ
3個/料理用バナナ1本/キャ
ッサバ1本/長ネギ1本/ニンニク
1片/ローリエ3枚/コリアン
ダー適量/コンソメキューブ1個
/塩・コショウ各少量

- 鍋に鶏もも肉とスベアリブ、水を入れ、沸騰したらあくを取り、数分煮込む。
- ①にニンニク、ローリエ、コンソメキューブ、塩・コショウを加える。
- ②にぶつ切りにしたトウモロコシ、ジャガイモ、料理用バナナ、キャッサバを順に入れ、さらに煮込む。
- ③を皿に盛ったら、みじん切りにした長ネギとコリアンダーを振り掛ける。

【SHOP INFORMATION】



プントプンタ

〒150-0022
東京都渋谷区恵比寿南2-13-14
茶屋坂T&Kビル1F
TEL:03-5704-6280
営業時間:17~25時
日曜定休

イチオシ!

M OVIE

『おばあちゃんが伝えたかったこと カンボジア・トゥノル・口村の物語』

ポル・ポト政権時代、カンボジア各地で行われた大虐殺。あの時、何が起きていたのか。虐殺現場近くのトゥノル・口村の人々に密着取材したのが本ドキュメンタリー。「おばあちゃん、何があったの?」。村の小学生の男の子が虐殺を生き抜いた村人にその声を掛けると、彼らは自らの体験を語り、当時の出来事を身振り手振りで再演し始める。長い間、暗い記憶に苦しんできた彼らの表情が、映画製作を通して明るくなっていくのが印象的だ。



2011年／カンボジア／54分
監督：エラ・ブリーセ、ヌ・ヴァ、トゥノル・口村の人々
公開：8月2日(土)よりユーロスペース(東京)他 全国順次公開
URL：thnolok.jp/
配給：コミュニティシネマセンター
TEL：050-3535-1573

E VENT

『こども国際フェスタ2014』

世界を身近に感じてもらおうと、子どもたちを対象にした体験型イベントが東京・恵比寿で開催される。各国の大使館が出展するブースでは、伝統的な遊びや芸術などをワークショップ形式で体験でき、メインステージでは民族舞踊やファッションショーなどが開催される。7月下旬から先行プログラム(事前申込制)として、各国の大使館を訪問したり、留学生と交流したりするチャンスもある。楽しく異文化に触れる絶好の機会だ。

会期：9月7日(日) 11～17時
会場：恵比寿ガーデンプレイス
問：こども国際フェスタ実行委員会
TEL：03-6417-9071
URL：somos-festa.com/

B OOK

『サッカーボールひとつで社会を変える スポーツを通じた社会開発の現場から』

毎年、世界各地で開催されている「ホームレス・ワールドカップ」。サッカーを通じて自分に自信をつけ、仲間の大切さを知り、ホームレス生活からの脱却を目指すイベントだ。このように今、サッカーを通して社会を変えようという動きが増えている。南アフリカではHIV／エイズを患う人たちがサッカーを始めたことで、感染の予防に向けた啓発活動に取り組むなど、前向きに生きるようになったケースもある。サッカーボールが生み出す社会の可能性について考えてみよう。



岡田千あき 著
大阪大学出版会
2,160円(税込)

この本を
1人の方に
プレゼント
詳細は
38ページへ

B OOK

『あなたが救える命 世界の貧困を終わらせるために今すぐできること』

目の前で子どもが川で溺れている。新しい靴がダメになってしまっただけで。さて、あなたは子どもを助けますか? そう問い掛けるのは哲学者の著者だ。先進国で豊かな生活を送る人々は、倫理的に開発途上国で飢餓に苦しむ人々を救う義務がある。本書では、なぜ私たちはそう頭で分かっているのに、実際には寄付しない人が多いのかなど、人間の心理に迫る。それぞれの所得に応じた寄付の基準を提案し、世界の貧困解決に向けて一人一人ができることを考える。



ピーター・シンガー 著
勁草書房
2,700円(税込)

この本を
1人の方に
プレゼント
詳細は
38ページへ

読者の声

「5月号特集ジェンダー「女性の輝きを力に」を読んで」
 ■表紙が良かった。自分の知らない世界がたくさんあふれていて毎号びつくりします。子どもたちの笑顔を見てみると、日本は物が豊かですが、心が貧しく見えてしまいます。物が少ないからこそ、自分たちで考え遊ぶ子どもたちの目は本当に美しい。世界が物ではなく、心の豊かさで幸せになれたらなと思う日々です。
 (神奈川県／男性／34歳)

■「ジェンダー」特集がとても良かったです。ナイジェリアの問題がちょうどニュースになっていて、他国では女性に対する姿勢がどのようなものだろうかと思っていました。今回の冊子を通じて世界の現状を知ることができて、とても勉強になりました。
 (埼玉県／女性／17歳)

■特集の中の「私のコレ」が世界を変える！」が印象的だった。ブルカのような衣装にヘルメットを着用した、パキスタンの建築学科の女子学生の姿には本当に驚かされる。女性の地位向上のために突破口を開けようとする先駆者の姿を見ることができた。
 (岡山県／男性／72歳)

「6月号特集中南米「ラテンパワーで開く未来」を読んで」
 ■国が変われば考え方も言動も違う。メキシコでカイセンを進めるときに、メキシコ人は悪い点をはっきり指摘しないから、日本人専門家にずばり言われて最初は抵抗があったと記載されていました。でもやはり、指導が正しく結果が出ればそれが信用に変わる。国民性の違いを乗り越えて、日本の良さが浸透することをこれからも期待したいです。
 (愛知県／女性／66歳)

■ポリビアの地球ギャラリ「山岳地の治療師」が印象に残りました。素朴な人々の営みがいいですね。心のつながりが感じられます。日本にはない財産ですね。
 (愛知県／男性／56歳)

本誌へのご意見・ご感想や
 JICAへのご質問を
 お寄せください。

プレゼント
 付き

添付のアンケートはがき、Eメール、FAXから、本誌に対するご意見やご感想、またJICAへのご質問を、氏名・住所・電話番号・職業・年齢・性別・ご希望のプレゼントを明記の上、お送りください。ご記入いただいた個人情報統計処理およびプレゼント発送以外の目的で使用いたしません。当選者の発表は発送をもってかえさせていただきます。

◎応募締切：2014年9月15日

Eメール：jica@idj.co.jp
 FAX：03-3221-5584(『mundi』編集部宛)

- ① ケニアのキコイのスタイ
- ② 書籍『サッカーボールひとつで社会を変える
 スポーツを通じた社会開発の現場から』(p37参照)
- ③ 書籍『あなたが救える命
 世界の貧困を終わらせるために今すぐできること』(p37参照)



①



②

③

本誌をご希望の場合は
 下記方法で
 お申し込みください。

申込方法

本誌をご希望の方には、送料をご負担いただく形でご送付いたします。巻末の払込取扱票に、氏名・住所・電話番号・ご希望の送付期間・送付開始月を明記の上、指定の金額を郵便局でお支払いください。入金の確認後、発送手配をいたします(入金から1週間程度かかることもありますのでご了承ください)。複数冊、またはバックナンバーをご希望の方は送料が異なりますので、下記までお問い合わせください。

申込先 (株)国際開発ジャーナル社 総務部(発送代行)
 住所 〒102-0083 東京都千代田区麹町3-2-4 麹町HFビル9F
 TEL 03-3221-5583
 FAX 03-3221-5584
 Eメール order@idj.co.jp



次号予告 (2014年9月1日発行予定)

インフラシステム輸出

経済発展に必要な不可欠なインフラ整備。世界に誇る技術力を持つ日本の民間企業が、開発途上国のインフラ整備に汗を流している様子と、それが現地の開発課題にどう貢献しているかを紹介します。

mundi

AUGUST 2014 No.11

編集・発行／独立行政法人 国際協力機構 Japan International Cooperation Agency : JICA

〒102-8012 東京都千代田区二番町5-25 二番町センタービル
 TEL : 03-5226-9781 FAX : 03-5226-6396 URL : http://www.jica.go.jp/
 バックナンバーはJICAホームページ (http://www.jica.go.jp/publication/mundi) でご覧いただけます。
 本誌掲載の記事、写真、イラストなどの無断転載を禁じます。



©Yuki Asada

みんなが笑顔になるスタイ

赤、青、黄…。灼熱^{レキ}の太陽の下、人々が身にまとった色鮮やかな布が、アフリカの広大な大地に映えて美しい。

アフリカにはさまざまな布があるが、特に東部で人気なのが“キコイ”だ。コットン100%の生地にストライプの柄。男性は腰に巻き、女性はストールにするなど、みんなが思い思いの用途で楽しんでいる。「初めてキコイを手を取った時、その柔らかさと、肌にすっとなじむ質感に感動しました」。そう話すのは、ウガンダの青年海外協力隊OBの水永貴夫さん。その魅力にすっかりはまってしまったという。

日本ではまだまだあまり知られていないキコイ。多くの人に親んでもらえるように商品化できないだろうか。帰国後、水

永さんはアフリカと日本をつなぐべく「キコイブランド」を立ち上げた。

「日本人に手に取ってもらうためには、流行で終わらせない“特別感”が必要だと思いました」。そこで主力商品として考案したのがベビー用品。柔らかな肌触りを生かして生み出したのは、何枚あっても困らないスタイだ。

今はケニアの間屋からキコイを仕入れて、日本で水永さんがデザインして縫製している。ネクタイが付いたもの、揺れると鈴の音が鳴るもの…。これまでにないかわいい仕掛けがいっぱいだ。

キコイのスタイを着けた赤ちゃんを見ると、優しい笑顔が自然と家族の中にあふれてくる。



キコイは鮮やかな糸が織り成すストライプの柄がかわいい

★キコイのスタイを3人にプレゼント!→詳細は38ページへ

★キコイブランドの商品は、ホームページ(kikoijapan.jp/)から購入可能。





私の なんとか しなきゃ!

Vol. 46

PROFILE

1977年大阪府出身。仙台育英学園高等学校サッカー部のMFとして活躍。卒業後は、ブランメル仙台(現ベガルタ仙台)、ジェフユナイテッド市原(現ジェフユナイテッド市原・千葉)、サンフレッチェ広島でプレー。2014年元旦の天皇杯決勝で現役を引退し、株式会社ベアフットを設立。サンフレッチェ広島×なんとかしなきゃ!プロジェクト国際親善大使。

2014FIFAワールドカップのSAMURAI BLUEの初戦を日本中が心待ちにしていたころ、私はブラジルではなく、対戦相手のコートジボワールに向かっていました。今回の日本戦で初めて、この国の名前を知った人もいるかもしれません。

アフリカのサッカー強豪国には国際的な舞台上で活躍している選手も多く、彼らの並外れた身体能力には驚かされます。しかし、地元の人たちの多くは家にテレビがなく、そんな“憧れのヒーロー”の試合を観ることができないというのです。そこで今回のワールドカップでは、JICAがソニー株式会社の協力を得てコートジボワールでパブリックビューイングを企画し、縁あって参加させていただくことになりました。

僕にとっては初めてのアフリカ。現地に着いて数時間後には、日本対コートジボワールの試合が始まりました。大きなスクリーンを前に、ドログバ選手が途中出場した時には歓声が上がりました。残念ながら日本は負けてしまいましたが、みんなが「お疲れさま」と声を掛けてく



れて、心が温かくなりました。数日後のコロンビア戦もパブリックビューイングが行われたのですが、この時は子どもから大人まで約1,000人が集まり、会場が一体となって自国のチームを応援している姿は感動的でした。

コートジボワールでは、長年の内戦を経て、まさに今、新しい国づくりが進められています。日本の戦後もそうだったと思いますが、国の基盤をつくることはそう簡単ではないでしょう。そんな中、国際協力の現場を案内して下さった日本人専門家の方々は想像を超える困難に直面しているはずですが、それを一切見せずにどうすればこの国が持続的に成長できるかを必死に考えていて、日本人として誇りに思いました。

地元の子どもたちのサッカーの練習にも参加させてもらったのですが、みんな本当に元気でたくましいですね。プレースタイルはとにかく全力でパワフル。ちょっと転んでも、泣く子なんて一人もいませんでした。

聞くと、彼らは毎日何時間も歩いて水

たくましく生きる人々

元プロサッカー選手 中島 浩司

NAKAJIMA Koji

くみをしたり、弟や妹の面倒を見たりと、どんなに小さくても、家族の一員としての役割があるそうです。自分でもその責任を感じながら、日々を懸命に生きているのだと思いました。そんなたくましさを、日本の子どもたちにも感じてほしいですね。

人生の大部分をささげてきたサッカーがきっかけで、コートジボワールの現実の一部を自分の目で確かめることができました。開発途上国が直面するさまざまな課題に対して、現地の方々と懸命に汗を流している日本人の存在を知り、もっと多くの人に彼らの取り組みと途上国の現実を知ってほしいと思いました。平和都市・広島を拠点に、僕自身も行動を起こしていきたいと思っています。

「なんとかしなきゃ!プロジェクト」は、開発途上国の現状について知り、一人一人ができる国際協力を推進していく市民参加型プロジェクトです。ウェブサイトやFacebookの専用ページを通じて、さまざまな国際協力の情報を発信していきます。

なんとかしなきゃ で 検索